

大学図書館の蔵書进行分析した研究の現状と課題

山田翔平[†]

[†] 東京大学大学院教育学研究科

本研究ノートの目的は、大学図書館の蔵書を量的な側面から調査、分析した研究をレビューし、既往研究の分析の観点と成果を整理するとともに、今後、大学図書館の蔵書を対象とした研究をするにあたって必要となる分析の観点を提示することである。文献レビューの結果、大学図書館の蔵書を量的に扱った研究は、1. 蔵書評価、2. 蔵書の実態の把握、3. 大学図書館所蔵の資料の特徴の把握の3つの観点から主になされていることが明らかになった。また、既往研究の成果として、I. 特定の資料群の具体的な所蔵状況、II. 対象館の蔵書の相対的な特徴、III. 資料の分布が明らかにされていることが示された。既往研究の成果の分析から、今後、大学図書館の蔵書を調査、分析する際に俯瞰的な視点をとる必要があることが示された。

キーワード：大学図書館、蔵書、蔵書評価、文献レビュー

目次

- 1 はじめに
- 2 大学図書館の蔵書を量的に分析する研究の概観
 - 2.1 蔵書評価
 - 2.1.1 チェックリスト法
 - 2.1.2 比較による評価
 - 2.2 蔵書の実態の把握
 - 2.2.1 単館を対象にした研究
 - 2.2.2 複数館を対象にした研究
 - 2.3 大学図書館所蔵の資料の特徴の把握
 - 2.4 その他の研究
- 3 既往研究の成果と今後の課題
 - 3.1 既往研究の成果
 - 3.1.1 特定の資料群の具体的な所蔵状況
 - 3.1.2 対象館の蔵書の相対的な特徴
 - 3.1.3 資料の分布
 - 3.2 既往研究から導かれる課題
- 4 おわりに

1 はじめに

大学図書館は、大学の使命達成に寄与するために設置される図書館である。「大学設置基準」第38条には、「大学は、学部の種類、規模等に応じ、図書、学術雑誌、視聴覚資料その他の教育研究上必要な資料を、図書館を中心に系統的に備えるものとする」と記されており、大学の機能に応じた資料の収集、提供を行うことが大学図書館の役割であるといえる。大学の使命について、学校教育法を参照すれば、「大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする」とある。このような大学の使命を支える大学図書館の機能としては、学習図書館的機能と研究図書館的機能の2つがあることが指摘されている¹。逸村(2017)は、大学図書館は、資料の収集、整理、保存、利用という知の再生産に寄与し、学術情報流通の一翼を担ってきたことを指摘している²。

逸村(2017)の指摘の中で、学術情報流通という役割が触れられているが、図書館の中でも大学図書館が最もこの役割を果たしているといえる。海野ら(1999)は、研究活動を保障し、必要な学術情報を提供する社会システムとして図書館があると、伝統的な図書館は、学術情報の流通を担う印刷メディアを収集、保管、組織化する機能があり、これらの機能を日常的な業務を通じて果たすことで学術情報流通に貢献していると指摘している³。

図書館の中でも、大学の附属施設として、学習図書館の機能と研究図書館の機能を果たそうとする大学図書館は、学術情報流通を担う図書館の代表的存在である。

逸村(2017)の指摘にあるように大学図書館の学術情報流通において実際に流通の対象となるのは、資料である。その資料は、先に参照した「大学設置基準」第38条にあるように、「図書、学術雑誌、視聴覚資料その他の教育研究上必要な資料」である。大学図書館を始め、学術情報流通を担う図書館について、その知識基盤としての実態について把握するのであれば、それらの資料の収集、保管、組織化に着目することが適切である。それは、すなわち、図書館の蔵書の特徴に着目することに相当する。

では、学術情報の流通を担う代表的な存在である大学図書館について、これまでに形成されてきた蔵書の特徴は十分に明らかになっているのだろうか。大学の教育と研究を支え、学術情報の流通を中心的に担う大学図書館は大学の中で知識基盤として機能している。大学図書館の蔵書の特徴を把握することは、大学を支える知識基盤の実態を明らかにすることに寄与し、また、その特徴の記述は、資料の電子化が進む学術情報流通について考えていく際の参照点となることから重要である。本研究では、大学図書館の蔵書に関する研究の現状を把握するため、大学図書館の蔵書を対象に調査、分析を行った研究を概観し、既往研究の分析の観点と成果の整理を試みる。今後の研究では、より広く大学図書館全体の蔵書の特徴を捉えることを目標とすることから、本研究では、とりわけ、大学図書館の蔵書について量的な側面から調査、分析した研究を中心に取り扱うこととした。

図書館の蔵書を対象に問う研究は、

- 1 蔵書を対象にした研究
- 2 蔵書構成を対象にした研究
- 3 蔵書の利用を対象にした研究

という3つに分類することができる。この分類は大学図書館の蔵書についても同様である。この中で、本研究は、大学図書館について、1のうち、蔵書の実態を量的な側面から調査、分析した研究、及び2のうち、構築された蔵書を量の観点から評価する研究を主にレビューする。これらの研究の

成果は、これまで構築されてきた大学図書館の蔵書の特徴を断片的に明らかにするものである。本研究は、大学図書館の蔵書とは全体としてどのようなものかという関心のもと、これらの研究のレビューを通じて、これまで明らかにされてきた大学図書館の蔵書の特徴を整理する試みである。

レビューする研究の範囲は1990年以降としたが、例外的に日本国内の研究の範囲は1980年以降とした。1990年以降としたのは、1990年以降、電子化された目録情報の利用可能性が向上し、研究者側も計算機を用いてより大きな規模のデータを容易に扱うことができるようになったことで、蔵書を量的な側面から調査、分析する研究が増加するためである。それより前の時代においては、大学図書館の蔵書を量的に調査、分析した研究は減り、対象とする図書館数、タイトル数も少なくなる。ただし、日本国内の研究については、国外の研究に比べ論文へのアクセスが容易であること、そして、参考となる緻密な研究が複数あることから、例外的に範囲を1980年以降とした。

以下、第2章では、既往研究を分析の観点ごとにまとめて概観し、第3章では、それらの研究によって明らかにされてきたことを整理するとともに、大学図書館の蔵書を対象にする研究の課題について言及する。

2 大学図書館の蔵書を量的に分析する研究の概観

蔵書を量的な側面から調査、分析する研究は、その分析の観点から以下の3つに類型化することができる。

- 1 蔵書評価
- 2 蔵書の実態の把握
- 3 大学図書館所蔵の資料の特徴の把握

1の蔵書評価は、既存の蔵書の維持管理活動の一環である。この蔵書評価の詳細は2.1で述べる。2の蔵書の実態の把握は、対象となる図書館、資料の所蔵状況を捉えようとするものである。3の大学図書館の所蔵資料の特徴の把握は、特定の大学図書館の蔵書の特徴ではなく、大学図書館全体に所蔵される資料について、資料の側の属性から、その特徴を捉えたものである。この3つに分類できなかった研究はその他の研究とした。以下、本章

では、それぞれの観点においてどのような研究がなされているかについて見ていく。

2.1 蔵書評価

蔵書評価はコレクション（蔵書）形成のプロセスの一過程に当たる。一般に、コレクション形成は、1. コミュニティ分析、2. コレクション形成、3. 選択、4. 収集、5. 不要資料選択、6. 評価の6つのプロセスから成る⁴。蔵書評価は、6番目の評価に該当し、形成されたコレクションを価値基準を設定して評価する試みである。蔵書評価はその分析の対象から2つの評価手法に分類ができる。

- 蔵書中心評価法
- 利用者中心評価法

蔵書中心評価法は、規模、主題領域、利用、予算支出といった側面から蔵書を数量的に評価する方法である。利用者中心評価法は、利用者の要求の達成度合いを基準とした評価や利用者の実態調査を行う方法である。本節では、前者の蔵書中心評価法を行った研究について概観する。蔵書中心評価法のうち、量を評価の基準とする代表的な方法としてチェックリスト法がある。チェックリスト法は、「図書館のコレクションとして望ましいと考えられる資料をふくむ文献リストや書誌と現行の図書館コレクションを照合して、その所蔵状況を調べるもの」⁵とされている。この説明では、「現行の図書館コレクションを照合」、すなわち、他館の蔵書を基準とした評価もチェックリスト法に含まれている。しかし、実際にこれらの方法を採用する研究では、チェックリスト法を文献リストや書誌との照合をする方法に限定し、「現行の図書館コレクションを照合」する方法は異なる方法として差異化している。そこで、本研究でも、文献リストや書誌を参照して評価する方法のみをチェックリスト法として限定し、他館の蔵書を基準として評価する方法とは分けることとした。

2.1.1 チェックリスト法

チェックリスト法は、調査対象とするリスト中のタイトル数と大学図書館数、具体的な評価の関心（特定分野の資料、特定の大学図書館）の組合せ方によって複数の評価の視点が設定できるが、主にとられる視点として以下の3つが挙げられる。

- 1 特定の図書館の所蔵タイトル数

- 2 特定のタイトルの所蔵館数

- 3 図書館群単位での所蔵タイトル数

なお、1つの研究が必ずしも1つの視点のみをとるのではなく、複数の視点を取り入れて、調査、分析する研究もある。

まず、1の特定の図書館の所蔵タイトル数を捉える研究から見ていく。Lotlikar (1997) は、ミラーズヴィル大学のガンザー図書館の政治科学分野の図書、雑誌についてチェックリスト法を用いた評価を行っている⁶。後藤 (1999) は、東京都立大学図書館の蔵書を対象に、初心者向け読書リストに記載のある図書の所蔵率について調べている⁷。Nisonger and Meehan (2008) は、ハーバード大学とイエール大学の図書館システムを対象に、ポート競技に関する図書の所蔵をチェックリスト法を用いて比較している⁸。Wiersma (2010) は、コロラド大学ボルダー校の工学図書館の蔵書と蔵書構築方針との差異を検討するために、生命工学分野の単行書、雑誌を対象に幾つかの評価を行い、その中で、雑誌、単行書それぞれについてレビュー誌、及び図書リストを参考にしたチェックリスト法を行っている⁹。鈴木 (2016) は、匿名の1校の大学の大学図書館を対象に、2010年から2014年の5年間に刊行された教育分野の図書のリストを基にした所蔵調査を行っている¹⁰。

次に、2の特定のタイトルの所蔵館数を捉える研究である。加藤 (2004) は、大学図書館職員の研修のために、図書館情報学の基本的な外国雑誌の整備が必要であるとして、図書館情報学の基本外国雑誌80件を定め、それらが大学図書館に所蔵、継続受入されているかどうかをNACSIS-CATを用いて調査している¹¹。Best (2010) は、公共図書館や学校図書館に比べ、知的自由が保障されている大学図書館において、所蔵に抵抗がある図書(challenged books)がどれだけ所蔵されているかを調べるため、*American Library Association's Challenged Books 2007* という書架から排除、撤去の依頼の多かったタイトルのリストの中で上位10のタイトルがどれだけ所蔵されているかを、公共図書館9690館と大学図書館1800館を対象に調べている¹²。

最後に、3の図書館群単位での所蔵タイトル数を捉えた研究である。ここには、特定の図書館群単位で所蔵を調査、分析した研究が含まれる。石

井ら (1995) は、共同蔵書構築を試みる相互協力組織のための蔵書評価手法を開発し、その有効性について検証する一環として、自然科学分野英語会議録と社会科学分野英語学術図書のリストを用いた所蔵調査を NACSIS-CAT 参加機関を対象に行っている¹³。Dilevko and Gottlieb (2003) は、サハラ砂漠以南のアフリカの地域の出版者によって刊行された図書の北アメリカの大学図書館における所蔵状況を調べるために、北米研究図書館協会 (Association of Research Libraries; 以下 ARL と表記) 加盟の大学図書館 111 館における当該地域の出版者によって刊行された 495 のタイトルの所蔵を調べている¹⁴。大場ら (2012) は、日本の図書館蔵書の総体的な姿を明らかにするため、2006 年上半期に日本で刊行された図書のリストを用い、国立国会図書館、大学図書館、公共図書館にどれだけ所蔵があるかを調査している¹⁵。小山ら (2012) は、日本の大学図書館におけるマンガの所蔵の実態を明らかにするため、大学図書館におけるマンガ所蔵の大規模な所蔵調査を行っている¹⁶。Williams and Deyoe (2014) は、社会の多様性を反映した若者向けのコレクションが形成されているかという観点から、宗教倫理、障害、LGBT それぞれに関する図書のチェックリストを作成し、アメリカの公共図書館、大学図書館、学校図書館、計 5004 館を対象に所蔵調査を行っている¹⁷。

2.1.2 比較による評価

本項では、大学図書館の蔵書を評価するために蔵書の特徴を大学図書館間の比較から分析をした研究について概観する。

Ciliberti (1994) は、ウィリアム・パターソン大学図書館における蔵書評価の一環として、特殊教育とカウンセリング分野の単行書を対象にした評価を行っている。この研究では、OCLC/AMIGOS Collection Analysis CD という OCLC の単行書データ 10 年分を収録した CD を用い、37 の州立大学のグループを基準点として設定して、自館との蔵書数の比較、及び独自所蔵、重複所蔵の調査をしている¹⁸。Grover (1999) は、蔵書規模の大きな大学図書館には、チェックリスト法を用いた評価は適さないとして、より規模の大きい蔵書を指標として蔵書評価を行うことを提案している¹⁹。この研究では、ブリガムヤング大学図書館の特定の分野の蔵書数を、自館より大きな規模の蔵書を

持つ 5 つの大学図書館の蔵書数の平均値と比較している。Beals and Gilmour (2007) は、将来的な共同によるコレクション形成のための準備として、協力関係にある 3 つの大学図書館を対象に動物学分野の単行書の蔵書数を OCLC's WorldCat Collection Analysis という蔵書分析ツールを用いて比較、分析している²⁰。McClure (2009) は、アラバマ大学図書館のロマンス語 (イタリア語、フランス語、スペイン語) の単行書の蔵書の特徴を把握するために、蔵書の構成において目標とすべき 4 つの大学図書館を定めて、それらの蔵書を基準として自館がどれだけの割合の図書を持っているか、どれだけ独自の蔵書があるかを調査している²¹。Wilen and Ahtola (2006) は、将来的な蔵書評価の予備的な研究として、ヘルシンキ大学図書館とタンペレ大学図書館の歴史分野、及び英国の歴史に関する蔵書を、刊行年、記録言語、独自所蔵、貸出回数といった観点から比較している²²。Powers (2011) は、限られた財政の下での蔵書構築の検討のために、サウスフロリダ大学における芸術分野の蔵書を、課程設置が類似する 3 つの大学の図書館、及び目標となる 3 つの大学の図書館の同分野の蔵書を比較対象として、主に蔵書数の観点から分析している²³。Henry et al. (2008) は、セント・レオ大学のキャンロン記念図書館を対象にした蔵書評価を行っている。その過程では、権威的なリストを用いたチェックリスト法も行っているが、主な方法として、蔵書規模が類似した大学図書館との比較分析を、OCLC's WorldCat Collection Analysis を用いて行っている²⁴。2.1.1 でも、引用した Wiersma (2010) は、コロラド大学ボルダー校の工学図書館の生命工学分野の蔵書評価を行う中で、4 つの同格の大学図書館が所蔵する雑誌の所蔵率の調査、及びそれらの大学図書館との分野ごとの蔵書数の比較を行っている²⁵。

これらの研究は、分析用ツールの開発によって可能となった調査、分析である。基本的には、評価に際して基準となる大学図書館を定めておき、それらの大学図書館と評価対象となる大学図書館の蔵書数を比較して対象となる大学図書館の蔵書を評価するものであり、この方法で明らかになる蔵書の特徴は相対的なものであるといえる。

2.2 蔵書の実態の把握

本節では、蔵書の実態、あるいは所蔵状況について把握しようとする研究について概観する。なお、研究の目的に蔵書評価を掲げている、蔵書の実態、所蔵状況に焦点を当てて報告しているものは、本節に含めることとした。まず、単館を対象にした研究について触れ、次いで複数館を対象にした研究について見ていく。

2.2.1 単館を対象にした研究

長沢ら (1983) は、レファレンス・コレクションの最適規模を考える過程の第一歩として、特定の大学図書館のレファレンス・コレクションの規模、特性などの実態の把握を試みている。この研究では、国際基督教大学のレファレンス・コレクションのうち洋書を対象に、参考資料のタイプ、主題分野、出版年、言語、刊行年、出版者、編著者、刷次といった項目について調査、分析している²⁶。Dole (1994) は、ニューヨーク州立大学ストーニーブルック校の図書館の蔵書の実態について同格の大学図書館との比較から捉える必要性を説き、OCLC/AMIGOS Collection Analysis CD を用いて、ストーニーブルック校の図書館よりも規模が大きな図書館のグループ、同程度の規模の図書館のグループそれぞれと蔵書と比較している²⁷。この研究では、ストーニーブルック校で教授される主要な学問分野の蔵書数と、各グループの図書館の蔵書数の平均値とを比較している。Genoni (2013) は、オーストラリアにおける国家規模での分散所蔵の実現可能性のテストのために、ロイヤルメルボルン工科大学図書館のデザイン分野の単行書の所蔵状況を調査している²⁸。Genoni (2013) は、蔵書分析ツールである OCLC Collection Analysis software を用いて、ビクトリア州の学術図書館のグループ、及びメルボルンにある図書館のグループと発行年ごとの蔵書数の比較、重複所蔵、独自所蔵のタイトル数の算出をしている。Stepanova (2013) は、マイアミ大学図書館のスラブ語の蔵書について、蔵書構築方針と利用者ニーズに応じた蔵書構成がなされているか評価するために、全体で見た言語構成比、利用頻度、分野ごとで見た言語構成比、利用頻度について調査、分析している²⁹。Bain et al. (2016) は、外在的なベンチマークから捉えた評価ではなく内在的な蔵書評価をするために、マギル大学のシュリック図書館の物理学と工学の電子書籍

も含めた単行書について、蔵書数、年代ごとの蔵書数、貸出回数、学部の規模と蔵書数との関連などを調査、分析している³⁰。

2.2.2 複数館を対象にした研究

複数館を対象にした研究は、

- A. 特定の資料群の所蔵の有無の調査
- B. 相対的な蔵書の特徴の分析
- C. 重複所蔵、独自所蔵の調査、分析

の3つに分けることができる。

まず、A の特定の資料群の所蔵の有無を調査する研究から見ていく。赤星 (1984) は、全国の短期大学図書館において、児童図書がどの程度所蔵され、どのように利用されているかについて調査するため、児童図書の所蔵の有無や冊数、その分類方法、利用状況について各短期大学にアンケートを実施している³¹。Sanders (2009) は、一般読者向けの図書を置くことは、学術図書館の公共奉仕のために求められるとして、アメリカの45の公立大学を対象に一般読者向け図書の独立したコレクションの有無、そのコレクションの規模、設置年、年間貸出数について調査している³²。Sanders (2009) は、また、自身が所属するイーストカロライナ大学のジョイナー図書館における一般読者向け図書のコレクションについてコレクションの冊数、一日あたりの貸出数、利用者属性を調査している。

次に、B の相対的な蔵書の特徴を分析する研究である。三浦ら (1983) は、レファレンス・コレクションを形成する際に選択収集の指針となるような基本的なレファレンス・コレクションを確定するために、東京大学総合図書館、三田情報センター、国際基督教大学図書館の3館のレファレンス・コレクションのうち洋書を対象に、コレクションの規模、参考資料のタイプ、主題分野、出版年、言語、刊行年といった項目について調査している³³。三浦ら (1983) は、また、3館で重複する図書についても調べている。Dole and Chang (1997) は、大学図書館コンソーシアム単位での蔵書について評価するべく、4つの大学図書館によって形成されるコンソーシアムを対象に、コンソーシアム全体のタイトル数と他の大学図書館のグループの所蔵タイトル数との比較、コンソーシアム内の図書館ごとの所蔵タイトル数の比較を行っている³⁴。Perrault

(1999)は、書誌ユーティリティのデータを分析して、国家規模での蔵書の傾向を明らかにしようとしている³⁵。この研究では、ARLの統計のデータとOCLC/AMIGOS Collection Analysis CDを用いて、ARLに加盟する大学図書館を1グループとして年度毎の購入タイトル数、タイトルの平均価格を調査する他に、蔵書規模の異なる他の大学図書館グループを比較対象に置きながら、各グループの蔵書について、刊行年ごとのタイトル数、刊行年と分野ごとのタイトル数、英語タイトルと非英語タイトルの割合の変化について調査、分析している。Adithya and Talawar (2011)は、インドの図書館におけるレファレンス・コレクションの実態を明らかにするため、カルナータカ州の7つの大学図書館における参考資料の所蔵冊数、参考資料のタイプについて調査している³⁶。Shaw (2016)は、大学図書館の蔵書の特徴を記述的に明らかにするため、26の大学図書館の蔵書を対象に、それらの単行書の蔵書の構成をuniversityとcollegeの差異に関心を置きながら調査、分析している³⁷。

また、相対的な蔵書の特徴の分析に関しては、個別の研究ではないが国家単位での所蔵調査の中で報告がなされている。イギリスでは、国家規模での蔵書実態を記述するために蔵書分析用のソフトウェアの試験運用がなされ、その中では、幅広い分野の蔵書を持つ3つの大学図書館、及び専門的な蔵書を持つ3つの研究機関を対象に、蔵書数の比較、蔵書の刊行年ごとの分布、重複所蔵、独自所蔵について調査、分析がなされている³⁸。オーストラリアでは、主要な大学図書館及び国立図書館の蔵書を把握し比較する調査が行われている³⁹。この調査では、人文科学、社会科学分野の印刷資料を対象とし、東洋アフリカ研究学院の蔵書を評価基準に添えながら、8つの大学図書館とオーストラリア国立図書館の蔵書を比較している。

最後に、Cの重複所蔵、独自所蔵に関する研究である。先述した所蔵状況に関する研究の中でも、その研究の過程で重複所蔵、独自所蔵について調査、分析しているものはあったが⁴⁰、ここでは、研究の観点による分類をするために、研究の主たる目的として重複所蔵について調査、分析している研究について個別に項目を立てて見ていく。Genoni and Wright (2010)は、オーストラリアのリサーチ・コレクションにおける単行書の分布を理解す

るために、メルボルン大学、モナシュ大学、オーストラリア国立図書館を含む4施設の図書館を対象に重複所蔵、独自所蔵のタイトル数について調査、分析している⁴¹。Genoni and Wright (2011)は、オーストラリアの研究図書館における重複所蔵、独自所蔵、及び図書分布を調べるために、3つの研究図書館群を含む機能の異なる6つの図書館群の間における独自所蔵、重複所蔵のタイトル数、割合について、印刷体の単行書を対象に調査し、それぞれの群の蔵書が相互に依存しあう独自性を有していることを明らかにしている⁴²。これらの研究は、既出のGenoni (2013)⁴³と合わせて、オーストラリアにおける国家規模での分散所蔵の実現という大きな目標のために行われているものであり、重複所蔵は少なく、独自所蔵のタイトルが多いほうが良いという理念が背後に存在している。

2.3 大学図書館所蔵の資料の特徴の把握

これまで見てきた研究は、特定の大学図書館、図書館群を調査、分析の切り口としていた。本節では、大学図書館に所蔵がある資料の集合を第一の関心に据えながら蔵書の特徴を分析する研究を見ていく。石井 (1990a)は、資料保存の協力体制のための蔵書の現状分析として、蔵書の重複分布の特徴を分析している⁴⁴。この研究では、目録所在情報データベースの和図書、洋図書のデータを用いて、重複分布に対してZipfの法則が適用可能であるかを検証している。石井 (1990b)は、図書館の集合をシステムとして捉えて現状を記述しようとする観点から、大学図書館の蔵書規模についてZipfの法則の適用可能性を検討している⁴⁵。柴山 (2002)は、日本の大学図書館における学術情報の流通状況の調査のために、大学図書館において広く所蔵されている和文誌と欧文誌についてそれぞれ上位100誌までをとり、和文誌では分野、欧文誌では分野と発刊国に関して分析している⁴⁶。

2.4 その他の研究

吉村、上田 (1983)は、日本の大学図書館をめぐる社会的な変化、政策があった1965年から1980年の間の大学図書館の年次推移を捉えることで、量的に改善された側面と、構造的に変化のない部分を示す研究を行っている⁴⁷。この研究では、大学図書館を設置者の区分(国立・私立)と蔵書規模

の区分(大・中・小)の掛け合わせでグループ化し、調査項目の指標の経年での変化を追っている。斎藤(1986)は、大学図書館の基礎的な資源である蔵書を、その総量である蔵書数として捉え、大学図書館の主要な指標との関係から分析し、その現状と特質を明らかにすることを行っている⁴⁸。

3 既往研究の成果と今後の課題

本章では、これまでの研究によって大学図書館の蔵書についてどのようなことが明らかにされているかを整理し、大学図書館の蔵書を対象にする研究の今後の課題について述べる。

3.1 既往研究の成果

既往研究によって明らかにされてきたことは、以下の3点に集約できる。

- 1 特定の資料群の具体的な所蔵状況
- 2 対象館の蔵書の相対的な特徴
- 3 資料の分布

本節では、これらを順に解説する。

3.1.1 特定の資料群の具体的な所蔵状況

これは、2.1.1のチェックリスト法を用いた蔵書評価のうち単館を対象にした研究や、2.2の蔵書の実態を把握する研究の中で明らかになることである。これらの研究では、特定の資料群の所蔵状況、資料の属性ごとの所蔵状況が調査、分析されている。Lotlikar(1997)⁴⁹や鈴木(2016)⁵⁰といったチェックリスト法を用いた特定分野の資料の所蔵状況の確認では、包括的なリストを用いることによって、対象館におけるその分野の図書の所蔵状況の記述がなされている。2.2.1で見た長沢ら(1983)⁵¹や三浦ら(1983)⁵²では、特定の大学図書館のレファレンス・コレクションについて、参考資料の属性ごとのタイトル数の算出によるコレクション構成の詳細な分析がなされている。

3.1.2 対象館の蔵書の相対的な特徴

この特徴は主に、2.1.2の比較による蔵書の評価をする研究、2.2.2の複数館を対象に蔵書の実態を把握する研究において明らかになる。2.1.2に含めた研究においては、対象となる大学図書館の蔵書について、他の比較対象となる大学図書館や研究図書館に比べて蔵書数が多い分野、少ない分野、あるいはそれらの図書館から見て、蔵書数が十分な分野、十分でない分野が調査、分析されている。

2.2.2の複数館を対象に蔵書の実態を把握する研究では、対象となる大学図書館群の群間における特徴が分析され、報告されている。例えば、2.2.2のBで触れた、Dole and Chang(1997)⁵³では、大学図書館コンソーシアムを形成する4つの大学図書館間で、各館の所蔵タイトル数、及び主要分野別の所蔵タイトル数が比較されている。イギリスでは、3つの大学図書館、及び3つの研究機関の蔵書を対象に、蔵書数の比較、蔵書の刊行年ごとの分布、重複所蔵、独自所蔵について調査、分析がなされている⁵⁴。

3.1.3 資料の分布

この特徴は、2.1.1のチェックリスト法を用いた蔵書評価を行う研究、2.2.2で概観した研究のうち、B、Cに該当する研究において示されるが、それぞれの類型の研究によって明らかにされる分布は異なる。チェックリスト法を用いた研究では、

- 1 特定の図書館の所蔵タイトル数
- 2 特定のタイトルの所蔵館数
- 3 図書館群単位での所蔵タイトル数

という視点から評価が行われていた。このうち、2の特定のタイトルの所蔵館数を調査する研究では、リストにある資料が、対象となる大学図書館においてどのように分布しているかが、3の図書館群単位での所蔵タイトル数を調査する研究では、リストにある資料が、対象となる図書館の集合においてどれだけ所蔵されているかが示されるが、これらは対象となる特定の資料群の分布を提示しているといえる。

2.2.2のB、及びCで紹介した研究においては重複所蔵や独自所蔵の調査がなされているが、特定の大学図書館間に見られる重複所蔵、独自所蔵を調べることは、捉え方を変えれば、それらの図書館の間での資料の分布を調べているといえる。

なお、上記の特定の資料の分布、特定の大学図書館間における資料の分布を示すものとは観点が異なるが、2.3で触れた石井(1990a, 1990b)⁵⁵は、それぞれ、所蔵館数(重複所蔵)と蔵書数の分布の特徴を捉えるものである。

3.2 既往研究から導かれる課題

先述の既往研究の成果のうち、3.1.1で見た特定の資料群の具体的な所蔵状況については、各研究の目的に対応した知見が得られている。3.1.2の対

象館の蔵書の相対的な特徴と 3.1.3 の資料の分布についても、個々の研究が対象とする範囲では十分な調査、分析がなされてきている。ただし、この 2 つの特徴について、個々の大学図書館を複数対象にして見るのではなく、少し視点を広げて、大学図書館を大学の属性ごとに調査、分析するということについては、相対的に見てあまり行われてきていないといえる。3.1.2、及び 3.1.3 に該当する成果を挙げた研究のうち、大学図書館を大学の属性から検討している研究は、university と college の蔵書の構成を比較した Shaw (2016)⁵⁶ のみであり、それ以外の研究では、調査対象館の比較対象ないし比較基準として大学図書館のグループを設定し、差異を調べるに留まる。言い換えれば、俯瞰的な視点から大学図書館の蔵書を捉えるということが十分にされていないといえる。無論、この指摘は、これまで行われてきた研究を批判するものではない。対象館の間で見られる相対的な蔵書の特徴は評価の指標として十分に機能しており、蔵書の実態を把握することにも貢献している。また、対象館の間における資料の分布は、研究目的に対応した記述的特徴として機能している。けれども、大学図書館の属性ごとに見た蔵書の特徴が明らかにされていない状態では、特定の図書館に絞った議論は探索的なものであり、研究の結果の位置づけは定まらない。

蔵書を調査、分析する際に着目すべき資料の属性の側から見ても、大学図書館の蔵書について包括的な調査、分析がなされてきているとはいえない。既往研究で蔵書の特徴を捉える際に着目されてきた主な資料の属性は、

- 1 主題分野
- 2 刊行年
- 3 記録言語
- 4 出版国

であり、この中でも特に、1 の主題分野がよく着目されており、他の資料の属性は十分に考慮されてきてはいない。既往研究では、特定の主題分野の蔵書について調査、分析する研究が多かったが⁵⁷、複数の主題分野の蔵書を対象にして分析した研究は少ない⁵⁸。3.1.1 や 3.1.2 に該当する成果を挙げた研究においては、対象館の蔵書については、資料の属性ごとに緻密な分析がなされてきているが、

それらの成果はあくまでも少数の大学図書館の蔵書に関する知見に留まる。もちろん、個々の既往研究の中ではその目的に対応した調査対象が設定され、十分な調査、分析結果が得られている。だが、大学図書館の蔵書について俯瞰的な視点をとるならば、それらの知見は断片的な蔵書の特徴の記述である。以上のことを踏まえると、大学図書館の蔵書の特徴の分析においては、大学の属性を考慮することに加えて、資料の属性の側から総合的に分析することが求められる。資料の属性を総合的に扱うためには、主題分野について包括的に見ていくと同時に、他の資料の属性についても幅広く見る必要がある。他の資料の属性としては、例として、物理的な属性である判型や頁数、商品として流通に関わる属性である価格が挙げられる。また、2.1.1 のチェックリスト法を用いた研究では、特定の性質を持った資料集合について所蔵実態が調査されている。これらの性質には、障害や LGBT に関連する図書、所蔵に抵抗がある図書 (challenged books) のように後天的に付与されるものと、レファレンスブックやマンガのように先天的に付与されるものがある。このうち、先天的に付与される性質はその資料集合の用途、機能を反映するものであり、着目すべき資料の属性であるといえる。特に、大学図書館の蔵書については、シリーズや教科書といった先天的な性質について捉えていくことが求められる。

俯瞰的な視点から大学図書館の蔵書を把握が不十分であることは、2.3 の大学図書館所蔵資料を対象にした分析に該当する研究が少ないことにも関連している。大学図書館に所蔵される資料全体を扱った研究としては、日本国内での資料の分布の仕方を分析した研究はある⁵⁹ が、資料の側の属性を観点として分析を行った研究は、日本の大学図書館に高頻度で所蔵される雑誌を調査し、その属性を分析した柴山 (2002)⁶⁰ だけである。したがって、大学図書館に所蔵される資料全体の集合において大きな割合を占める資料の属性といった、大学図書館に所蔵される資料の全体的な特徴の把握も十分にされていないといえる。

4 おわりに

本研究では、大学図書館の蔵書について量的に調査、分析した既往研究を分析の観点ごとに整理

し、概観した。その結果、これまでの研究によって明らかにされてきたこととして、特定の資料群の具体的な所蔵状況、対象館の蔵書の相対的な特徴、資料の分布の3つがあることが示された。また、これらの研究の整理から、大学図書館の蔵書について俯瞰的な視点から十分に調査、分析がなされていないことが明らかになった。本研究では、今後、大学図書館の蔵書について調査、分析が求められることとして、

- 1 大学の属性から見た大学図書館の蔵書の特徴
- 2 資料の属性から見た大学図書館の蔵書の特徴
- 3 大学図書館に所蔵される資料の全体的な特徴

の3点を挙げる。これらの特徴の把握は、知識基盤としての大学図書館の実態を明らかにするために必須であり、これらの特徴の記述は、個々の大学図書館の蔵書を対象にする研究や資料の電子化が進む学術情報流通をめぐる議論において参照点となることから重要である。

注

- 1) 三浦逸雄, 根本彰 『コレクションの形成と管理』 雄山閣, 1993, p. 71.
- 2) 逸村裕 “偉人たちの知識はそこにある” < 逸村裕, 田窪直規, 原田隆史編 『図書館情報学を学ぶ人のために』 世界思想社, 2017 > p. 25.
- 3) 海野敏, 影浦峽, 戸田慎一 『学術情報と図書館』 雄山閣, 1999, p. 201.
- 4) 三浦, 根本, *op. cit.*, p. 18.
- 5) 三浦, 根本, *op. cit.*, p. 225.
- 6) Lotlikar, Sarojini D. “Collection assessment at the Ganser Library: A case study,” *Collection Building*, vol. 16, no. 1, 1997, p. 24–29.
- 7) 後藤久夫 “チェックリスト法による大学図書館における蔵書評価の一例: 東京都立大学付属図書館における初学者向け図書収集状況” 『大学図書館研究』 vol. 57, 1999, p. 39–42.
- 8) Nisonger, Thomas E. and Meehan, William F. “The Harvard and Yale university library rowing collections: A checklist evaluation and semi-availability study,” *Library Collections, Acquisitions, & Technical Services*, vol. 31, no. 3–4, 2008, p. 119–137.
- 9) Wiersma, Gabrielle. “Collection assessment in response to changing curricula: An analysis of the biotechnology resources at the University of Colorado at Boulder,” *Issues in Science & Technology Librarianship*, no. 61, 2010, Available at: http://www.istl.org/10-spring/refereed1.html?a_aid=3598aabf (accessed date: 2017/10/11)
- 10) 鈴木守 “大学図書館における蔵書評価に関する事例研究: 教育分野の図書の所蔵状況について” 『常葉大学教育学部紀要』 vol. 36, 2016, p. 1–18.
- 11) 加藤信哉 “大学図書館における図書館情報学分野の外国雑誌の所蔵状況について: 予備的調査” 『名古屋大学附属図書館研究年報』 vol. 2, 2004, p. 1–14.
- 12) Best, Rickey. “Censorship or selection? Academic library holdings of the top ten most challenged books of 2007,” *Education Libraries*, vol. 33, no. 2, 2010, p. 18–35.
- 13) 石井啓豊, 川村幸, 村田邦恵 “共同蔵書構築を目的とした蔵書評価の構築方法” 『図書館学会年報』 vol. 41, no. 1, 1995, p. 31–41.
- 14) Dilevko, Juris and Gottlieb, Lisa. “Book titles published in Africa held by North American university research libraries and review sources for African-published books,” *Library & Information Science Research*, vol. 25, no. 2, 2003, p. 177–206.
- 15) 大場博幸, 安形輝, 池内淳, 大谷康晴 “図書館はどのような本を所蔵しているか: 2006年上半期総刊行書籍を対象とした包括的所蔵調査” 『日本図書館情報学会誌』 vol. 58, no. 3, 2012, p. 139–154.
- 16) 小山信弥, 吉田倫子, 吉井潤, 上田晶子, 安形輝 “日本の大学図書館におけるマンガの所蔵状況” 『三田図書館・情報学会研究大会発表論文集』 2012, p. 33–36.
- 17) Williams, Virginia K. and Deyoe, Nancy. “Diverse population, diverse collection? Youth collections in the United States,” *Technical Services Quarterly*, vol. 31, no. 2,

- 2014, p. 97–121.
- 18) Cilberti, Anna C. “Collection evaluation and academic review: A pilot study using the OCLC/AMIGOS Collection Analysis CD,” *Library Acquisitions: Practice & Theory*, vol. 18, no. 4, 1994, p. 431–445.
 - 19) Grover, Mark L. “Large scale collection assessment,” *Collection Building*, vol. 18, no. 2, 1999, p. 58–66.
 - 20) Beals, Jennifer B. and Gilmour, Ron. “Assessing collections using brief tests and WorldCat Collection Analysis,” *Collection Building*, vol. 26, no. 4, 2007, p.104–107.
 - 21) McClure, Jennifer Z. “Collection assessment through WorldCat,” *Collection Management*, vol. 34, no. 2, 2009, p. 79–93.
 - 22) Wilen, Raine and Ahtola, Anneli. “Collection evaluation: Micro and macro levels-preliminary guidelines and the results of a pilot study of two Finnish University Libraries,” *Signum*, no. 3, 2006, p. 39–43.
 - 23) Powers, Audrey. “A collection development plan for art and art history at the University of South Florida,” *Art Documentation: Bulletin of the Art Libraries Society of North America*, vol. 30, no. 1, 2011, p. 69–73.
 - 24) Henry, Elizabeth, Longstaff, Rachel and Van Kampen, Doris. “Collection analysis outcomes in an academic library,” *Collection Building*, vol. 27, no. 3, 2008, p. 113–117.
 - 25) Wiersma, *op. cit.*
 - 26) 長沢雅男, 三浦逸雄, 戸田慎一 “大学図書館におけるレファレンス・コレクションの数量的分析” 『東京大学教育学部紀要』 vol. 21, 1983, p. 111–131.
 - 27) Dole, Wanda V. “Myth and reality: Using the OCLC/AMIGOS Collection Analysis CD to measure collections against peer collections and against institutional priorities,” *Library Acquisitions: Practice & Theory*, vol. 18, no. 2, 1994, p. 179–192.
 - 28) Genoni, Paul. “A distributed national stored collection: Testing the possibilities,” *Australian Academic & Research Libraries*, vol. 44, no. 2, 2013, p. 75–89.
 - 29) Stepanova, Masha. “Analysis of the Russian, Eastern European, and Eurasian studies collection at Miami University Libraries,” *Slavic & East European Information Resources*, vol. 14, no. 2–3, 2013, p. 205–216.
 - 30) Bain, Cheryl D., Colosimo, April L., Mawhinney, Tara and Houle, Louis. “Using WorldShare Collection Evaluation to analyze physical science and engineering monograph holdings by discipline,” *Collection Management*, vol. 41, no. 3, 2016, p. 133–151.
 - 31) 赤星隆子 “全国の短期大学図書館における児童図書所蔵に関する実態調査” 『図書館界』 vol. 36, no. 2, 1984, p. 78–82.
 - 32) Sanders, Mark. “Popular reading collections in public university libraries: A survey of three southeastern states,” *Public Services Quarterly*, vol. 5, no. 3, 2009, p. 174–183.
 - 33) 三浦逸雄, 戸田慎一, 小田光宏, 長沢雅男 “大学図書館におけるレファレンス・コレクションの比較分析” *Library and Information Science*, vol. 21, 1983, p. 71–102.
 - 34) Dole, Wanda V. and Chang, Sherry S. “Consortium use of the OCLC/AMIGOS Collection Analysis CD: The SUNY experience,” *Library Resources & Technical Services*, vol. 41, no. 1, 1997, p. 50–57.
 - 35) Perrault, Anna H. “National collecting trends: Collection analysis methods and findings,” *Library & Information Science Research*, vol. 21, no. 1, 1999, p. 47–67.
 - 36) Adithya, Kumari H. and Talawar, V. G. “Reference sources collection in university libraries of Karnataka: A study,” *Annals of Library & Information Studies*, vol. 58, no. 2, 2011, p. 93–99.
 - 37) Shaw, Debora. “Overlap among college and university library collections,” *Collection Management*, vol. 41, no. 3, 2016, p. 117–132.

- 38) CURL/RSLP collection mapping project based on OCLC/Lacey iCAS software, *Final Report*, 2002. Available at: <http://www.rluk.ac.uk/wp-content/uploads/2014/02/iCAS-final-report.pdf> (accessed date: 2017/10/21)
- 39) Australian research libraries collection analysis project, *Report*, 2004. Available at: http://www.library.uwa.edu.au/_data/assets/pdf_file/0004/524794/arlcip_final_report.pdf (accessed date: 2017/10/21)
- 40) Genoni, *op. cit.*
三浦, 戸田, 小田, 長沢, *op. cit.*
Shaw, *op. cit.*
CURL/RSLP collection mapping project based on OCLC/Lacey iCAS software, *op. cit.*
Australian research libraries collection analysis project, *op. cit.*
- 41) Genoni, Paul and Wright, Janette. “Assessing the collective wealth of Australian research libraries: Measuring overlap using WorldCat Collection Analysis,” *Australian Library Journal*, vol. 59, no. 4, 2010, p. 197–207.
- 42) Genoni, Paul and Wright, Janette. “Australia’s national research collection: Overlap, uniqueness, and distribution,” *Australian Academic & Research Libraries*, vol. 42, no. 3, 2011, p. 162–178.
- 43) Genoni, *op. cit.*
- 44) 石井啓豊 “大学図書館蔵書の重複分布と Zipf の法則について” 『図書館学会年報』 vol. 36, no. 3, 1990, p. 97–107.
- 45) 石井啓豊 “我が国の大学蔵書に関する順位規模分布について” 『図書館界』 vol. 42, no. 4, 1990, p. 246–251.
- 46) 柴山盛夫 “わが国の大学図書館における学術情報流通状況の分析” *NII Journal*, vol. 4, 2002, p. 61–72.
- 47) 吉村直子, 上田修一 “わが国の大学図書館の推移:1965–1980: 168 大学図書館の統計分析” *Library and Information Science*, vol. 21, 1983, p. 103–119.
- 48) 斎藤泰則 “我が国の大規模大学図書館の蔵書と各図書館指標との関係” 『大学図書館研究』 vol. 28, 1986, p. 46–53.
- 49) Lotlikar, *op. cit.*
- 50) 鈴木, *op. cit.*
- 51) 長沢, 三浦, 戸田, *op. cit.*
- 52) 三浦, 戸田, 小田, 長沢, *op. cit.*
- 53) Dole and Chang, *op. cit.*
- 54) CURL/RSLP collection mapping project based on OCLC/Lacey iCAS software, *op. cit.*
- 55) 石井, 1990a, *op. cit.*
石井, 1990b, *op. cit.*
- 56) Shaw, *op. cit.*
- 57) Lotlikar, *op. cit.*
Wisrsma, *op. cit.*
Ciliberti, *op. cit.*
Grover, *op. cit.*
Beals and Gilmour, *op. cit.*
Wilen and Ahtola, *op. cit.*
Powers, *op. cit.*
Dole, *op. cit.*
Genoni, *op. cit.*
- 58) Grover, *op. cit.*
Dole, *op. cit.*
- 59) 石井, 1990a, *op. cit.*
石井, 1990b, *op. cit.*
- 60) 柴山, *op. cit.*

Current Status and Issues of Research of Academic Library Collections

Shohei YAMADA †

† Graduate School of Education, the University of Tokyo

The aim of this study is to conduct a review of research which quantitatively analyses academic library collections, and to summarise the viewpoints and outcomes of these previous studies. This study reveals that viewpoints of previous studies can be divided into three categories: collection evaluation, clarifying scope and extent of collections, and description of trends in the nature of materials owned by academic libraries. This review show that previous studies have clarified three features of academic library collections: collection situation of specific materials, relative characteristics of collections, distribution of materials among collections. An analysis of the outcomes of this research indicates that a holistic overview of academic library collections is required for future research.

Keywords: Academic Libraries, University Libraries, Collection, Collection Evaluation, Literature Review